BAISOUIN NEWS AOYAMA

梅窓院通信

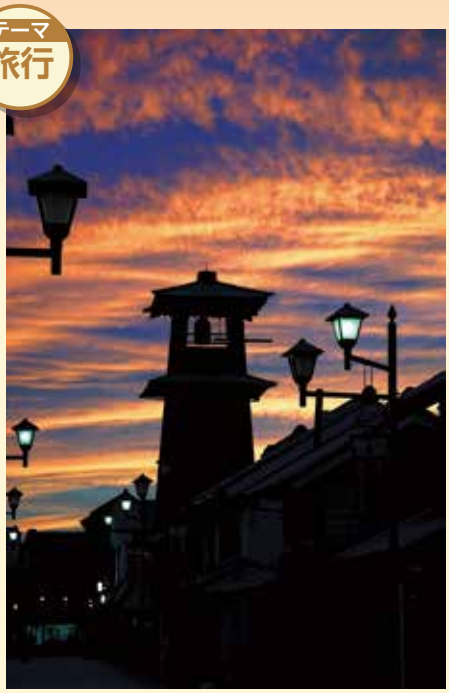
新年号

No.80

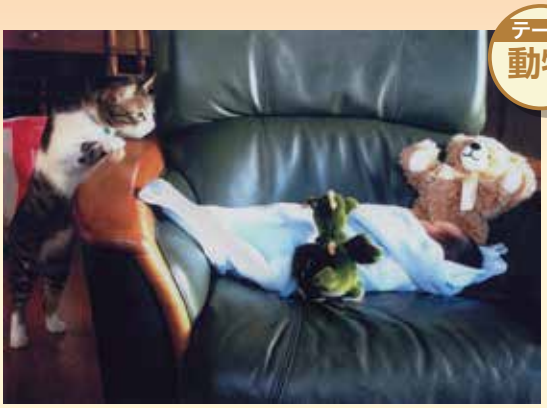
2016/01/01

青山

テーマ 旅行



テーマ 動物



「背伸びして赤ちゃんを見る猫のフサちゃん」

撮影：

この時どんな思いを持って見ているか計り知れません。今ではもう存在を受け入れ我関せずです。

第6回 秋彼岸写真展 優秀賞受賞作品

「川越慕情」撮影：

川越在住ですが、このような情景に接しますと、恰も違う街に旅行したような錯覚に陥ります。そんな街、川越に是非お運びください。

テーマ 家族

「炎天下の一息」

撮影：

炎天下のお祭りで山車を引いています。休み休み水でひと息。

テーマ 自然

「金屏風絵巻」撮影：

夕刻、極楽浄土を思わせる東京湾と富士山の荘厳な姿です。高度7000メートル大阪伊丹から羽田への空路で空撮しました。

住職挨拶

梅窓院第二十五世 中島 真成

新年明けましておめでとうございます。

平成二十八年の初春を迎えましたが、今年もまた健やかで穏やかな一年になることを願ってやみません。

さて、本新年号の表紙を四枚の写真が飾っていますが、昨秋の彼岸会に開催した写真展の各テーマでの優秀賞受賞作品です。多くの応募作品を彼岸会に展示し、皆さんの投票で選ばれた作品です。受賞作品以外も素敵な写真ばかりで選ぶのが大変だったのではないでしょうか。

多くのご応募をいただきましたこと感謝致します。この秋彼岸写真展は恒例行事ですので、シャッターを押す時に、いつも写真展を念頭にお入れ下されば幸いです。

そのお彼岸ですが、シルバーウィークと重なったことで、中日にお参りの方が集中せず、お寺としては対応しやすくなりました。彼岸にはほとんどのお墓にお花が供えられる梅窓院、皆さんのご先祖への想いを深く感じるのが、この春と秋のお彼岸です。

お墓といえば、昨今はお葬儀やお墓の形態が色々な形になってきています。一言でいえば簡略化、簡素化ということなのかもしれません。そうした中、梅窓院でも期限を設けたお墓の募集を開始致しました。最短五年という期間限定のお墓で、期間を相談の上決定して、その期間が過ぎた時点で永代供養墓へ合葬させていただくというお墓です。詳細はお問い合せ下さい。

今年五月の団体参拝旅行ですが、鎌倉の光明寺へ参ります。昨年十月に晋山式（住職のお披露目式）をされた　大僧正台下に拝謁させていただくお願いをしています。

多くの皆様のご参加をお待ちしています。

法話

仏教歳時風物詩（32）

大晦日の一日

新宿区　香蓮寺住職　勝崎　裕彦

朝な朝な寒さがきびしくなって行く師走十二月も、今日は三十一日、大晦日である。かつて旧暦時代には、陰暦十二月三十日がいわゆる大つごもり、三十日も三十日、まさしく、大三十日であったわけである。

大晦日の今日一日、今年一年を振り返って素直に回顧内省し、あれやこれやの過失や失敗を大いに悔い改めたい。また、あれもしたい、これもしたいと思い定めて、なにもできなかった計画倒れ、掛け声倒れの多かったことを、真摯に恥じ入りながら反省したい。この一年の最後の日、心しなければならないことであり、身を引き締めて、心を定め確かめて、一年三百六十五日を全うしたい。そして身と心も改まって新しく、初春の新年を迎えたいのである。

そうした我が身と心の置きどころ、身心のあるべきありようのたより、よすがを大晦日の歳時習俗の中に尋ね、仏教俳句の心を理解したい。

十二月のことを臘月というが、その伝で大晦日を臘日という。古代中国で、冬至の後の第三の戌の日に臘祭（猟祭）という狩猟の供養祭を行なったことに由来する。

また除日といい、除夕といい、除夜というのは、行く年・旧年を除く日であり、夕であり、夜であるからである。年の日・年の夕、年の宵・年の晩・年の夜ともいうわけである。まさに、大年（大歳）・大年越の年夜・年一夜ということである。

門松や年棚飾り・床飾りといった年用意もすべて整い、台所方の正月料理「おせち」の準備なども、万事に渡って遺漏はない。大晦日の夜、年越しそばもおいしく食べて、もはや除夜の鐘を聞くばかりである。

まずは江戸時代、井原西鶴は、

大晦日定なき世の定かな　（西鶴）

と作句し、蕉門の森川許六は、

大晦日分別ばかり残りけり　（許六）

と作句して、わずか十七文字の中にそれぞれ印象的な諦観を示した。

さて以下は仏教俳句である。

年ゆくや星座曼陀羅のごとくあり　（絵馬）

乞食の見上ぐる天を年行けり　（朱鳥）

臼田亜浪に師事した八木絵馬は明治大学教授で、新興俳句を展開した人。冬の星座の年越しを、曼陀羅宇宙のパノラマに収めた。野見山朱鳥は、「ホトトギス」の同人で写生を重視した心象俳句を目指した人。一人の乞食僧にとっても、天上天空は大きく高く年を行くのである。

仏壇を灯す孤影や除夜の母　（爽雨）

年の夜の蠟の匂ひやお念仏　（欣一）

皆吉爽雨も「ホトトギス」の同人。写生句の真髄を追求して、対象に密着して核心を捉える人といわれている。一年を仕舞う慈母の確かな姿を仏壇のみあかしの中に見つめている。沢木欣一は東京芸術大学教授で、東大在学中から加藤楸邨に師事した人。即物・即興・対話の三要素を総合的に連繋・連関した俳句があるということを説いた、独特の欣一俳句を志向した人である。除夜念仏の中に「蠟の匂ひ」を捉えたのである。

さて私自身の好みでいえば、明和・安永・天明期に関東・江戸を中心に活躍した加舎白雄の次の句を揚げたい。

行く年やひとり噛みしる海苔の味

そしてもう一句。子規党の私のもっとも好きな正岡子規の句である。

漱石が来て虚子が来て大三十日

明治二十八年十二月三十一日の句である。この年の秋、有名な「柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺」を吟じているが、その年の大晦日の子規の一日である。

（大正大学前学長）

九・十・十一月の行事報告

第66回念仏と法話の会
10月7日（水）

十夜法要・芋煮会
11月21日（土）

秋彼岸会法要・彼岸寄席
9月23日（水）

秋彼岸寄席、三遊亭歌る多師匠

M・ファン・デン・フック ピアノリサイタル
11月28日（土）

文化講演会
10月25日（日）
「薬膳で健康に」
武鈴子氏

修正会（しゅしょうえ）

2016年1月1日（金）

修正会法要

午前10時～　2階　本堂

お雑煮

午前11時～　1階　観音堂エントランス

※お雑煮の振る舞いは元旦のみになります。
修正会に参列頂いた方から優先的にお雑煮の振る舞いをさせて頂きます。
なお、数に限りがございますので予めご了承下さい。

（絵馬について）
新年のお参りに来て頂いた方にお配りしている絵馬は、元旦のみ1軒に1体のお渡しとさせて頂いております。
2体以上ご希望の方は事前に文書（FAXかハガキ）でお申し付け下さい。2体目から1体千円でお譲り致します。

（暦について）
各檀家さまに1部同封させて頂きました。2部以上ご希望の方はこちらも文書（FAXかハガキ）にてお申込み下さい。
2部目から1部千円でお譲り致します。

新年によせて（修正会によせて）

正月の初め、諸宗の寺院では社会の平和と人々の幸福を祈って法会を修します。これを「修正会（しゅしょうえ）」といいます。

「修正」とは、過ちをあらためて正しきを修めるということで、修正会も古来、奈良・平安時代は悔（け）過（か）（仏法僧に対して自ら犯した罪や過ちを悔い改める）法要で、その起源は中国の年始の儀式にあるようです（注：諸説あり）。

修正会は基本的に、3日ないし7日間にわたって天下泰平・五穀豊穣・万民快楽（けらく）などを祈願する法会でしたが、現在では各寺院により期間が異なり、梅窓院では正月元旦に修正会を行なっています。

お正月には、とかく縁起の良し悪しが話題になりますが、そもそも「縁起」というのは仏教の根幹的思想で、原因があって結果がある、という因果論を指します。

「一年の計は元旦にあり」という諺にもありますように、新年を迎え、仏さまの前で身を正し、あらためて自分自身を見つめ直しましょう。そして色々なご縁の中に生かされている自分の姿を、あらためて仏教の教えに照らしてみる機会にして頂ければ幸いです。

ぜひ、ご家族そろって梅窓院修正会法要にご参拝下さい。法要の後には、ご参拝頂きました皆様方に、料理屋「光石」のお節料理とお雑煮が振舞われます。皆様のご参拝を心よりお待ちしております。

（法務部）

魅力は癒されるリズムと心身のリフレッシュ

今年は詠唱を始めよう

梅窓院ご詠歌

あこがれて　天つみそらを
眺むれば　心に見ゆる　慈悲の面影

梅窓院の行事でお唱え。写真は去年の秋彼岸、祖師堂にて。

数年前からのことですが、浄土宗の僧侶になるのに必要な科目の中に詠唱が入りました。

詠唱とはご詠歌、ご和讃、お舞いの総称で、ご詠歌とは法然上人などの詠まれた和歌や、それぞれのお寺の和歌に節を付けたもの、ご和讃とは行事の由来などに節を付けたもの、お舞いとはご詠歌とご和讃に合わせて、信仰の心を持って舞うことです。

梅窓院では平成十年に詠唱会が作られ、月に二回のお稽古、そして年に一度の大本山増上寺での発表会に参加し続けています。今特集ではこの詠唱の魅力をお届けします。

「詠唱の魅力は、何といっても日常生活とは異なるお寺という特別な空間で、お寺ならではのお勤めやご詠歌やご和讃の言葉を味わい、ゆったりとした旋律に包まれながら心が癒されることです」

梅窓院の詠唱会、正式名称、大本山増上寺吉水講の東京教区城西組梅窓院支部で指導にあたる泉　博美執事は詠唱の魅力をこう語る。

講師を務める泉一級詠唱教司。

現在、梅窓院の詠唱会の講員はお檀家さんが十八人、僧侶が六人。お檀家さんの講員はほとんどが女性で、ご高齢の方が多いという。

「女性はどうしても、結婚、子育て、そして育てた子供の結婚、さらに孫の面倒と家事や育児に追われ続け、自由な時間を持てるのは人生も後半、それこそ七十歳を過ぎてからになります。もちろんみんなが同じ人生というわけではありません、この六月から入会された方はまだ四十代で、最年少ですね。そして、最年長は九十代になられます。

高齢で数年前からお稽古に来れなくなってしまった方の娘様から、母がしていた詠唱を引き継ぎ、お仲間になりたいと申し出がありました。

とても嬉しく思い詠唱をしてきてよかったと思いました。今では月に二回のお稽古を楽しみにして下さっています」

参加した印象は？

「始めたばかりです」

まるで浄化されるようです

新入講員の　さん

お寺が好きで巡礼で四国へお参りした時のことでした。高野山のお坊さんが詠唱を聴かせてくれて感動しました。一目惚れならぬ一声惚れでした。ネットで調べて、去年の5月に見学させてもらい、6月から入りましが、毎回心のホコリを拭い去ってもらっているようです。昼間、時間に追われる仕事なので、詠唱はその疲れた心身をリフレッシュさせてくれる、とても楽しみな時間です。

「体験してみて」

鈴と撞木を持ってみました

梅窓院広報部　さん

詠唱会のお稽古に参加してみて、一見簡単そうで実際は難しいなと思いました。皆さんはメロディーに鈴と鉦とで拍子をとりながら綺麗に歌っていらっしゃっていて、お稽古の大事さが伝わりました。私はお稽古で、仏教の心に接し、詠唱をすることで普段の生活で味わえないものを感じられました。貴重な体験をありがとうございました。

年に一度、増上寺で日頃のお稽古の成果として奉納します。

増上寺での奉納は桜の季節に。

お十夜を前にしたお稽古では、練習が始まる前の茶話会に続き、十夜和讃、梅窓院のご詠歌、そして入退堂のご和讃などが唱えられました。また、その日は千葉の浄土宗寺院の詠唱会から六人が見学に来られていました。

鈴（れい）を左手に、撞木（しゅもく）を右手にしてスッと背筋を伸ばされている姿はそれだけで、凛としていて美しい。

そして泉先生の合図で一斉に声が響きわたる。耳あたりが良いゆっくりしたリズムとともに声が伸びていき、聞いている方もその歌詞と旋律に心がゆったりと浸み込んでくる。講員の通夜や葬儀の時に唱えることがあります。詠唱を歌うとは言わず、唱える、あるいは奉納すると言うように、仏に供えるものであり、あえてそれをジャンル分けすると、癒しの音楽ということになるのだろうか。

さて、年を重ねることは阿弥陀さまのお迎えが近づくこと。その阿弥陀さまたち仏さまに奉納する詠唱、身の回りが落ち着いてから始めても良いようだ。

稽古の様子。泉先生の指導のもと、楽しくお稽古できます。

楽譜が読めても読めなくても大丈夫。

梅窓院詠唱会　入会案内

■お稽古　毎月第二、四土曜日
午後二時十五分から
午後四時十五分まで
梅窓院内
椅子席です

■講　師　泉　博美執事
（詠唱教司一級）

■参加費　千円（お茶代）

■問い合わせ先
〇三（三四〇四）八四四七

インタビュー

梅窓院を囲む人々

supporters of baisouin

梅窓院先代御内室

大奥様

今号の囲む人々は連載中の梅真会（梅窓院の学寮に住んでいた方など、梅窓院と縁の深い僧侶の会）を陰で支えてこられていた梅窓院先代住職、中島真哉上人の奥様で現住職の御母堂であられる　　大奥様にお話しを伺いました。

◆本日はよろしくお願い致します。

さっそくですが、梅窓院にお嫁に来られたのはいつになられますか。

大奥様（以下大奥様）　結婚したのは昭和31年ですが、結婚して住んだのは梅窓院ではなく、埼玉県杉戸の倉常寺でした。青山の梅窓院に移ってきたのは昭和36年ですね。先々代の真孝上人がハワイの浄土宗別院の総長として迎えられることになり、急遽、お留守を預かることになったからです。

◆こちらに引っ越された当時の梅窓院はどんな感じでしたか。

大奥様　目の前の青山通りは今の半分くらいの幅で、梅窓院の境内の二百坪ほどが道路になり、お墓が入口に近くにありました。山門は空襲で焼けてなくなってしまい、青山家の墓地は楠木や銀杏の木などの大木が生えており、鬱蒼とした雰囲気でした。

◆そうですか、今の整備された墓地からは想像がつかないですね。

大奥様　そうですね。墓地が整備されて見違えるほど綺麗になったのは、息子である現住職のおかげですね。とても感謝しています。

◆その頃は既に住み込みの学生さんが梅窓院にいたのでしょうか。

大奥様　はい、この連載にも登場していた気仙沼の　　さんや主人と仲の良かった　　上人の甥の　　さんたちがいましたね。

真哉上人の代になってからは、　　さん、　　さん、お亡くなりになってしまいましたが　　さん、　　さんがいました。

◆みなさん、梅窓院の寮で寝起きをする随身でしたか。

大奥様　はい、寮には一部屋に二人ずつ、三部屋ありましたから6名いました。そして、毎年入学と卒業がありますから、1人から2人くらいの学生さんが入れ替わっていましたね。それと主人である先代の真哉上人は、随身という言葉を使わずに学寮、学生という言葉を使っていました。

◆そうした学生の世話はいかがでしたか。

大奥様　入った当時は学生たちとは10歳ぐらいしか違わなかったので、母親代わりというよりはお姉さんのように色々面倒をみました。

大変だったのは食事です。決められた食費の中でのやりくりで、結構大変でした。基本は一汁一菜でした。杉戸に比べたらそれは青山の物価は比較にならないくらい高かったですからね（笑）。

にこやかにお話しいただいた　　大奥様。

中島真成住職と大奥様。久しぶりの親子のツーショットとなった。

◆食事は皆さんで一緒にされていたのですね。

大奥様　はい、先々代住職の真孝上人、真哉上人の母、主人、そして子供と私、そこに学寮住まいの学生さんとお手伝いさん。それは賑やかな食卓でした。でも真孝上人は私たちが移り住んで、2ヶ月ほどでハワイに出発されましたので、同じ食卓はこの間だけでした。4年後に帰国されたときは住まいが別棟でしたので、昼食と夕食はお届けしておりました。

◆このシリーズでは、お酒は梅窓院時代に覚えました、という話も出ましたが……。

大奥様　主人である先代住職は特にお酒が好きでしたからね。ですが、毎日ではなく日を決めて飲んでいました。お酒好きな学生さんには楽しい思い出で、お酒が飲めない学生さんには辛かった思い出でしょう（笑）。

今も副住職としてこの梅窓院を支えてくれている藁谷上人は飲めない口で、貴方たち広報部の副部長の川添上人は飲める口でしたね。

◆そうですか。では、お二人には反対の思い出になっているかもしれませんね。また、お茶を大奥様に教えていただいたという方もいましたが。

大奥様　お茶（裏千家）は今の私の楽しみで、週に3回ほど生徒さんに指導しています。

今の新しいビルになる前は、数寄屋造りの立派な茶室がございました。

◆覚えています、立派なお茶室でしたね。

大奥様　少し自慢話になりますけれど、20年近く前ですが、橋本龍太郎総理のASEAN訪問の折、相手の国へ日本の伝統文化のひとつである茶道を紹介するために、代表としての拙いながらもお点前を披露させていただいたこともございます。懐かしい思い出の一つです。

◆そうですか、それは素敵な思い出ですね。ちなみに学生さんたちはいかがでしたか。

大奥様　近所にお住まいだったお茶の先生に梅窓院に来ていただき、学生さんたちに手ほどきをしていただいたのですが、男性ばかりだからか、いっこうにお点前が上がらず、先生にはお引き取りいただきました。

そして、私が外から若いお嬢様を何人かお入れして、男女一緒のお稽古にしましたら、学生さんたちが緊張するし、いいところを見せようと、みるみるお点前が上がりましたね（笑）。中でも　　さん（現　　上人）と　　さんには奥傳まで指導いたしました。

◆最後に梅真会の皆さんや現住職に何かございましたら。

大奥様　梅窓院で学生時代を過ごされた多くの上人が今も梅窓院の行事にお集まりいただいたり、法話をしに来ていただけること、大変有り難く深く感謝しております。

現住職には、先ほども申しましたが、墓地の整備、そして先代住職の立ち上げた仏教研究所を発展させてくれたことなど、一生懸命頑張っていると思います。どうぞ、これからも檀信徒の皆様と共に梅窓院の発展を心より願っております。

◆本日はありがとうございました。

青山散歩道

日本料理　赤寶亭

外苑西通りから入った閑静な住宅街の中に佇む赤寶亭は、ミシュランガイドにも掲載されている和食懐石のお店。

とにかく素材にこだわり、旬の食材を全国の生産者から直接取り寄せている。そしてその素材を創作料理のように手を加えすぎず、素材そのものの味覚を楽しんでもらいたい、というのが店主のこだわりで、新鮮な魚や野菜ならではの風味や香りが活きた料理に驚かされる。それを一軒家の建物をうまく仕切った落ち着いた雰囲気の中でゆっくりと味わえるのも一流店ならではのおもてなしだ。

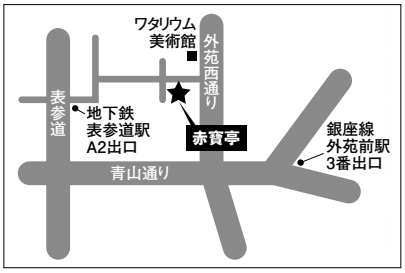
料理を引き立ててくれる日本酒やワインなどのお酒は、全国のこだわり銘柄からその時々で20種類ほど選んだものが揃えてあり、どれも間違いがなく美味しい。

取材は秋だったので、イクラ、松茸、銀杏、車エビ、イチジクなどを堪能したが、冬にはフグ、鯛、ヒラメ、海老芋などが味わえるように、どの季節でも旬の食材が次々と供されるのが魅力的だ。

昼食は八千円、夕食は一万五千円からと、お手頃とは言えないが、接待や家族の記念日の会食には最適のお店だ。家族や親族の集まる法事やお墓参りの後にもお薦めだ。

隠れ家のような情緒ある外観。

季節の食材が一品ずつ出される。



営業時間／昼　火～土12:00～14:30
　　夜　月～土18:00～23:00
※要予約制　※お子様の同伴は土曜日のみ可
定休日／日曜日　席数／28席
住所／東京都渋谷区神宮前3-1-14
TEL／03-5474-6889

青山俳壇

選者『ウエップ俳句通信』編集長　大崎 紀夫

◎**特選**

○月光をのせては波のたたみくる

◎**入選**

○秋草の伏して雫の光りをり

○秋のお輪澄んで仏壇一ぱいに

○紫に今を会津や桐の花

○焼秋刀魚みぞれ醤油で食すすむ

○久々に姉妹語らひ墓洗ふ

○境内の秋明菊に迎へられ

○初つぱなにバトン落とす子運動会

○紙のごとき松茸二枚土瓶蒸し

○鍛冶の店一軒残る菊の鉢

◎**選者詠**

○筋雲のいくつか茱萸を摘みをれば　**大崎　紀夫**

〈ワンポイントアドバイス〉

冬になりました。歳時記では、春・夏・秋・冬、それに新年の項があり、冬の季節の中で新年は特別の位置が与えられています。新年には食べ物に始まっていろいろな祭礼・行事があり、それは日本人にとり大切な時期だからだと思われます。新年のあれこれは、日本人の心にしみついた伝統的なもので、日本の文化といっていいかもしれません。

そんな新年の季語は実にたくさんあり、それらの季語と向き合う自分の心を詠んでいきたいものです。

投句募集

次回は「冬の季語」でご自由にお詠み下さい。1月4日(月)を締切、平成28年3月発送の『春彼岸号』にて発表致します。住所、氏名をお書き添えの上、ご応募下さい。尚、選者が添削し掲載する場合がございますのでご了承下さい。皆さまの投句をお待ちしております。

〒107-0062 港区南青山2-26-38
梅窓院「青山俳壇」投句募集係

「やぶれ傘」会員募集

青山俳壇の選者、大崎紀夫先生による俳句の会です。ご興味のある方は、下記の番号までご連絡下さい。

ウエップ編集室
電話03-5368-1870

第六十一回 食は命なり

食養研究家　武 鈴子

お屠蘇を飲み・七草粥を食べて健康な一年を！

日本人は薬草を薬か食物か区別できないほど食生活の中に摂り入れてきました。食生活が健康保持や病気予防の食療法なのです。

正月に飲むお屠蘇、七日の朝食べる七草粥は生命力あふれる野草や薬草のエネルギーをいただいて新しく始まる一年の無病息災を祈る風習です。お屠蘇は中国の名医・華佗の処方といわれて、忍冬、甘草、百合根、桂皮、桔梗、茯苓などの薬草が入った袋をお酒やみりんに浸して飲む薬酒です。屠蘇の由来について、古代中国の年中行事を記した『荊楚歳時記』には「屠蘇とは草庵の名である。昔ある人が草庵の中に住んでいて、毎年除夜になると、里の人々に1包の薬を配り、それを袋に入れて井戸の中に浸し、元日にその水を取って酒樽に入れておき、家中で飲んで疫病を予防したという。…」と記されています。

七草粥は、唐の時代、人日(1月7日)に「七種菜羹」という7種類の若菜を入れた汁物を食べて、長寿を願ったと言われます。

人日とは、中国では元旦から6日までを六畜(牛、馬、豚、鶏、羊、犬)に感謝する日とし、7日目を人の日として、この日七草を食べて新しい年の無病息災を祈りました。

日本では、セリ、ナズナ、ゴギョウ、ハコベラ、ホトケノザ、スズナ、スズシロなどの野草をきざんでお粥に入れ、7日の朝食べる習わしがあります。七日正月の七草粥は、お餅やおせち料理に疲れた胃腸を休めるための理にかなった風習です。

お屠蘇、七草粥をいただいて新しい年の健康長寿を祈りしましょう!

※食事や薬膳に関してご質問がございましたら、下記にお問い合わせ下さい。
東京薬膳研究所:03-6427-7563

お檀家さんに伺いました

平成27年秋彼岸法要にて

「命の有難みを写真で感じました」

今回梅窓院の秋彼岸写真展に出展した写真は、5年間の闘病生活を乗り越えて初めてシャッターを押したものです。昔から趣味にしていたカメラですが、病気の為なかなか触れずにいました。重い病気だったため、一時は死を覚悟していましたが、有難いことに回復することができました。妻に後押しされ、命あることに感謝の意を込めてこの写真を応募しました。去年の海の日に妻と杖をお供に日が沈むのを待ってお台場で撮影した記念の一枚です。

「終戦70年目でやっと兄を供養できました」

戦没者追悼法要には、ビルマ戦線で亡くなった長兄の供養をしたいと思い参列させて頂きました。兄とは12歳も年が離れていたため、正直あまり思い出がないのですが、戦没者の御詠歌で兄のことを思うと涙が止まりませんでした。戦場へ向かう日は、高知県の田舎の方なので立派な門出はなく、母がひとりでお見送りしました。兄の死後は高知での法要にも参列することができず、ずっと心の中で気になっておりました。今回、梅窓院で兄のご供養とお塔婆を建てられたこと、本当にありがたく、嬉しく思っております。

行事予定

第67回 念仏と法話の会

2月15日(月)
時間　11時20分～(受付11時より開始)
お斎／別時念仏会／法話／茶話会
法話:しあわせを求めて
講師　熊本教区 遣迎寺　山﨑 龍道上人

発　　行／梅窓院
発 行 日／平成28年1月1日
発 行 人／中島 真成
編　　集／青山文化村
住　　所／〒107-0062
東京都港区南青山2-26-38
電　　話／03-3404-8447
F A X／03-3404-8436
ホームページ／http://www.baisouin.or.jp/
E-Mail／jodo@baisouin.or.jp
題　　字／中村康隆元浄土門主
総本山知恩院第八十六世門跡

梅窓院のお墓とペット供養の窓口

日本エキスパートシステム 墓苑事業部から

お檀家様のご友人が梅窓院にお墓のご見学で来寺されました。地方にご実家のお墓があるそうですが、そちらは遠方でお参りが大変なので、都内にお墓を移したいと思っていたところ、友人が梅窓院にお墓をお持ちと聞き、梅窓院に足を運ばれたそうです。「お墓が一緒になれば「ハカトモ」になり嬉しいから……」と仰っておられました。

先日、テレビで「ハカトモ」が紹介されていました。同じ所にお墓があれば、一緒にお彼岸にお参りに行くこともできるし、亡くなっても同じ所のお墓なら友達でいられる、ということだそうです。

「ハカトモ」、初めて聞いた言葉ですが案外楽しいかもと感じた次第です。

平成28年 年間行事予定

◆修正会	1月1日(金)
◆第67回 念仏と法話の会	2月15日(月)
◆春彼岸会法要・寄席・物産展	3月20日(日)
◆はなまつり	4月6日(水)～8日(金)
◆増上寺御忌大会団体参拝	4月7日(木)
◆団体参拝旅行 鎌倉 光明寺	5月　※詳細は春彼岸号にてお知らせ致します。
◆大施餓鬼会法要	5月21日(土)
◆第68回 念仏と法話の会	6月8日(水)
◆開山忌法要・能楽奉納	6月11日(土)
◆盂蘭盆会法要	7月13日(水)
◆秋彼岸会法要・寄席	9月22日(木)
◆文化講演会	10月22日(土)
◆十夜法要・芋煮会	11月19日(土)
◆M・ファン・デン・フック・ピアノリサイタル	11月開催予定

※予定は変更になる場合もございます。ご了承下さい。

平成27年度 後期 仏教講座のご案内

全講座▶午後6時～8時　受講料▶無料　場所▶梅窓院祖師堂

講　題／**施餓鬼会を読む**
講　師／**阿川 正貫 先生**(浄土寺住職、大正大学講師)
●第3回…3月4日(金) 施餓鬼会の「表白」

講　題／**大乗仏教を読む —『維摩経』シリーズ(2)—**
講　師／**勝崎 裕彦 先生**(大正大学前学長、香蓮寺住職)
●第2回…1月21日(木) 菩薩品第四の教え
●第3回…2月25日(木) 文殊師利問疾品第五の教え

講　題／**法然上人のみ教え —『選択集』を読む—**
講　師／**林田 康順 先生**(大正大学教授、大本山増上寺布教師、慶岸寺副住職)
●第2回…1月25日(月)『選択集』第9章　お念仏の生活 —四修(下)—
●第3回…3月14日(月)『選択集』第9章　お念仏の生活 —四修(下)—

講　題／**仏教民俗学入門(4)**
講　師／**本林 靖久 先生**(大谷大学、佛教大学講師、真宗大谷派僧侶)
●第2回…2月　5日(金) 庶民信仰 —擬死再生と逆修—
●第3回…3月28日(月) 仏教民俗の諸相 —課題と展望—

※各講座第3回目の最終講座は、後半、茶話会となります。講師の先生方や受講生同士、この機会に交流を深めて下さい。